

時代を

読む

渡辺 利夫



この三月、東ティモールを訪れ滞在する機会を得た。二〇〇二年に独立を達成したばかりの「新生国家」である。とはいえ、独立にいたる過程で負った傷の痕は痛ましいほどに深く、現実には「新生国家」という晴れがましい語感からはまるで懸け離れた状態にある。

長らくポルトガルの植民地支配下におかれていた東ティモールに独立の機運が高まったのは、無血革命で生まれた本国の新政権が植民地放棄を方針として打ち出した一九七四年のことであった。独立をめぐる路線闘

東ティモール独立の傷痕

ル独立革命戦線」であり、同戦線は七五年に「東ティモール主共和国」独立を宣言した。しかし、インドネシアのスハルト政権はこれを認めず、逆に軍事介入により併合を図り、同国二十七番目の州として東ティモールを組み込んでしまった。

別な地位」を付与する旨を表明するや、独立への期待が一挙に高まり、九九年八月に国連主導で「独立か併合か」を問う直接住民投票が行われた。独立派の圧勝の結果に併合派が激高し、凄惨な破壊活動が開始された。インドネシア政府による戒厳令公布にもかかわらず、略奪、放火、殺人が全土を覆い、西ティモールやオーストラリアに逃げた難民は三十万人に及んだといわれて同族が血で血を洗う残虐行為を繰り返してまだ間もない。心的外傷が両派の住民の胸の底に深い闇のように居座っている。実際、報復を恐れて帰還できない難民が西ティモールにまなお二万人以上住まっている。

現在、独立派と併合派に分かれています。人口は九十二万五千人、面積は岩手県ほど。この「小国」を日本の政府開発援助(ODA)による開発モデルに仕立てることはできないものか。つくづく考えさせられる。東ティモールの旅から帰ってきた。

(拓殖大学学長)

争を制して全土を掌握したの

以来、東ティモールは司法、行政、立法はもとより教育、医療

などすべての面で「インドネシア化」を強いられ、同時に併合

モルやオーストラリアに逃げ

た。率

率

率